

論文要約

日本列島の東北地方と九州地方における 後期旧石器時代石器群編年と比較研究 －地域性成立の解明－

柳 田 俊 雄

本論は日本列島の後期旧石器時代にいつの時期から地域的な違いが現れるのかを明らかにすることを目的とする。ここでは東北地方と九州地方の二つの地域を取り上げ、石器群の内容について比較検討し、いつの時期にその違いが出現するのかを考察した。選択した二つの地方は日本列島の東西の端部に位置し、地理的には遠隔地となるものの陸続きである。東北地方は後期更新世の気候変動期でも津軽海峡によって北海道地方と遮断され、同様に九州地方が大陸と朝鮮海峡で切り離されていたと推定されている。以前の旧石器時代の研究では、石器製作に両地域の類似と相違が指摘されたが、その時期については漠然としていた。本論では両地方の後期旧石器時代石器群編年を再構築し、その結果について比較検討することでいつの時期から石器製作上の相違が出現してくるのかを明らかにすることができた。本稿では、始良T_n火山灰（AT）を援用しながら東北地方の「暗色帯」と九州地方の「黒色帯」を共時的層とし、①その下位から出土する石器群、②その中から出土する石器群、③その上位から出土する石器群、④黄褐色ロームの最上位から出土する石器群に分類し、両地方の石器群を比較して東西の地域的な違いがいつ頃から顕著に現れるのかを考察した。各章の構成は以下のようになっている。

序 章 本研究の目的と方法

第1章 東北地方南部の後期旧石器時代石器群の編年研究

第2章 東北地方西部の後期旧石器時代石器群の編年研究

第3章 東北地方東部の後期旧石器時代石器群の編年研究

第4章 東北地方北部の後期旧石器時代終末期石器群の様相

第5章 東北地方の後期旧石器時代石器群の編年研究

第6章 九州地方東部の後期旧石器時代石器群の研究－大分県岩戸遺跡の調査資料から－

第1節 九州地方の旧石器時代研究史抄

第2節 大分県岩戸遺跡第I文化層出土の石器群の研究

第3節 九州地方東部の石刃技法

第4節 九州地方東部の瀬戸内技法

第5節 九州地方後期旧石器時代終末期のナイフ形石器の形態的特徴

－西北・東九州を近年の中心に－

第6節 岩戸遺跡の評価と近年の九州地方の後期旧石器時代編年研究

第7章 九州地方の後期旧石器時代石器群の編年研究

第8章 日本列島の後期旧石器時代石器群の比較研究－東北地方と九州地方の二地域の比較－

終 章 日本列島旧石器時代編年と地域性の成立について

－東北地方と九州地方の資料群の比較から－

以下各章の概要を述べる。

序 章 本研究の目的と方法では、本研究の目的を示し、その方法として始良T_n火山灰や「黒色帯」・「暗色帯」を共時的な層とみなし、それによって整理された両地域の後期旧石器時代編年の構築とこれらに基づく比較研究の必要性を述べた。

第1章 東北地方南部の後期旧石器時代石器群の編年研究では、筆者が調査した会津地方笹山原A遺跡、山本遺跡、阿武隈川上・中流域の乙字ヶ滝遺跡、背戸B遺跡の発掘結果を踏まえ、福島県側の各地域で観察される「明度が低い、くすんでいる」層を「暗色帯」と認識し、これらの上位にある始良 Tn 火山灰 (AT) を基準に、東北地方南部の後期旧石器時代石器群の編年を構築した。「暗色帯」下～中位から出土する石器群を後期旧石器時代前半期とし、乙字ヶ滝遺跡、笹山原A遺跡、大谷上ノ原遺跡下層等をあげ、最古の一群を平林遺跡とした。「暗色帯」上位の黄褐色ローム下部から出土する石器群を後期旧石器時代後半期古段階とし、一里段A遺跡上層、弥明遺跡等をあげた。「暗色帯」上位にある黄褐色ローム上部から出土する石器群を後期旧石器時代後半期の新段階とし、背戸B遺跡、谷地前C遺跡等をあげた。さらに、「暗色帯」上位にある黄褐色ローム最上位から出土する石器群を終末期とし、笹山原 No. 17 遺跡等の細石刃石器群をあげた。

第2章 東北地方西部の後期旧石器時代石器群の編年研究では、奥羽山脈西側に位置する秋田県雄物川、米代川、山形県最上川、赤川流域の旧石器時代の遺跡をとりあげ、石器群の出土層序と「暗色帯」の関係を整理し、当地域の後期旧石器時代の石器群の編年を構築した。第3次調査を実施した山形県上ミ野A遺跡、踏査で出土層序を観察した秋田県七曲台遺跡、同此掛沢遺跡の石器群を中心に奥羽山脈西側の後期旧石器時代石器群を検討した。この地域では、縄文時代の黒色土層直下の上位層に明るく黄色味のある層があり、中位の層に「明度」の下がる層がある。この層を東北地方南部の「暗色帯」に対応する層と把握し、共時的な層と認識した。また、上ミ野A遺跡では「暗色帯」の直上に始良 Tn 火山灰 (AT) が検出された。西部では「暗色帯」の下部～中位にかけて出土する石器群を後期旧石器時代前半期とし、七曲遺跡群 (風無台Ⅰ、同Ⅱ、松木台Ⅱ、同Ⅲ遺跡)、下堤G遺跡、此掛沢Ⅱ遺跡等の石器群をあげた。風無台Ⅱ遺跡石器群は「暗色帯」下部から出土しており、より古い時期とした。一方、「暗色帯」上位の黄褐色ロームから出土する石器群を後期旧石器時代後半期とし、層位的な観察に基づいて上ミ野A遺跡二石器群、お仲間林遺跡、小出Ⅳ遺跡、越中山K地点遺跡等を位置づけた。さらに、「暗色帯」の上位にある黄褐色ロームの最上部には黒味が強く、漸移的に黄色味をます層から出土する石器群を後期旧石器時代後半期の新しい様相とし、小出Ⅳ遺跡、太郎水野2遺跡の石器群等をあげた。

第3章 東北地方東部の後期旧石器時代石器群の編年研究では、奥羽山脈東側に位置する宮城県名取川、岩手県北上川、胆沢川、和賀川、久慈川流域の旧石器遺跡の層序と石器群を整理した。この地帯は「盛岡―白河構造線」に沿う低地域の北側に相当する。仙台平野周辺では、「黒味が弱く、上層に比べると明度が低くなる」、「褐色～黄褐色の明度が落ちる」といった記載のみられる層や北上川中流域では「淡黄褐色土層、明褐色土層 (7.5YR5/6)、にぶい黄橙色土層 (10YR6/3)」と記述された層がある。これらを東北地方南部で確認できた「暗色帯」に対応する層と考えた。本章では、宮城・岩手県下の地元産テフラやスコリアと広域テフラのAT等を援用し、それらと「暗色帯」と対応する層を基準に編年を示した。東部では「暗色帯」と対応する層の下位に後期旧石器時代に先行する時期の石器群

があった。金取遺跡Ⅲ・Ⅳ層である。次に、「暗色帯」に対応する層の下位から出土した石器群を後期旧石器時代前半期とした。当地域では「暗色帯」中に地元産出の「ガラス質淡黄褐色火山灰層」（下位）と「AT」（上位）があり、それらを介在して石器群を二枚に細分が可能となった。上萩森遺跡Ⅱb文化層、峠山牧場Ⅰ遺跡A地区一第1文化層は「ガラス質淡黄褐色火山灰層」の下位、峠山牧場Ⅰ遺跡A地区一第2文化層、下成沢、南部工業団地-U地区一、愛宕山遺跡等の石器群等は「AT」下位の一群とした。また、同流域では大渡Ⅱ遺跡の泥炭層のAT直下で調整技術の発達した石刃技法が確認できた。次に、「暗色帯」に対応する層の上位にある黄褐色ローム層から出土した石器群を後期旧石器時代後半期とした。当該期を古・新・終末の3期に分け、下部の石器群を古段階とし、峠山牧場Ⅰ遺跡A地区一第3・4文化層、上萩森遺跡Ⅱa文化層、早坂平遺跡第X層の石刃石器群、大渡Ⅱ遺跡第2文化層、宮城名取川流域の山田上ノ台遺跡、野田山遺跡、上ノ原山遺跡第5層をあげた。上部を新段階とし、峠山牧場Ⅰ遺跡A地区第5文化層等をあげた。最上部から出土する石器群を終末期とし、早坂平遺跡の荒屋型彫刻刀や細石刃石器群をあげた。

第4章 東北地方北部の後期旧石器時代終末期石器群の様相では、東北地方東・西部地域で発見された「黄褐色土」、中の「くすんだ層」や「暗色帯」に対応する層、さらには「ATテフラ」が北東北で確認できなかったので青森県外ヶ浜町大平山元遺跡の調査成果を紹介し、この遺跡で解明された編年案から当地域の後期旧石器時代終末期の様相を考察した。

第5章 東北地方の後期旧石器時代石器群の編年研究では、「暗色帯」を基準に広域テフラAT、宮城・岩手県下の地元産出のテフラとスコリア層等を援用し、東北地方の後期旧石器時代編年案を提出した。後期旧石器時代を第1～4期に大別し、第1・2期を前半期、第3期を後半期、第4期を終末期とした。東北地方の後期旧石器時代前半期石器群は第1・2期とし、三つのグループに分けた。第一グループは、刃部磨製石斧、部分的に二次加工した粗雑なナイフ形石器、ペン先形ナイフ形石器や台形様石器を組成する。二次加工技術が面的に施すものが多いのが特徴である。剥片生産技術は石刃類を連続的に剥離するような技術がみられない。第二・三グループは、同様な石器組成を保有し、剥片生産技術に調整技術の未発達な石刃技法が登場する。第三グループは米ヶ森技法が加わる。前半期の第1・2期は「暗色帯」下位から下部にかけて発見される石器群である。

次に、後期旧石器時代後半期の石器群は第3期とし、第3a期（古）、第3b期（新）に細分した。第3a期は、打面や作業面に丁寧な調整をおこない、長大な石刃を生産する石刃技法が発達する。この時期の石器組成は、調整された石刃石核から剥離された長大な石刃を素材としたナイフ形石器、エンド・スクレイパー、彫刻刀形石器などで構成される。特に、東北地方全域で石刃の基部の両側辺や先端部の一部に二次加工を施すナイフ形石器が多く発見されるのが特徴的である。また、この時期、奥羽山脈西側では九州地方に多く分布する剥片尖頭器、近畿地方で濃密に出土する国府型ナイフ形石器、角錐状石器が発見され、西南日本の影響を受けた石器群が散見される。第3b期（新）は、石器組成に石刃の基部や先端に二次加工を施したナイフ形石器、彫刻刀形石器、エンド・スクレイパー等で構成さ

れ、調整技術の発達した石刃技法が継続してみられることで第3a期（古）と類似しているが、これらに槍先形尖頭器、小型の切出し形ナイフ形石器が加わる点で異なっている。石刃を素材としたナイフ形石器の基部が「舌」状、「くの字」状を呈し、打面側と側辺部を明瞭に区別できる形態も多くみられるのも第3b期の特徴である。第3a期の石器群は「暗色帯」に近い層準から発見される。第4期は細石刃石器群の出現した段階である。東北地方は、細石刃を剥離する手法の湧別技法、ホロカ型細石刃核、札滑型細石刃核等の製作技術に船底形石器、荒屋型彫刻刀形石器、両面加工尖頭器、石刃が検出された。また、西南日本的な野岳・休場型の円錐形細石刃核も青森県北部で発見され、大平山元遺跡は極寒冷期に津軽海峡を挟んで、北方文化の南下、西南日本文化が北上した複雑な様相も伺えた。

第6章 九州地方東部の後期旧石器時代石器群の研究—大分県岩戸遺跡の調査資料から—では、大分県大野郡清川村（現豊後大野市）に所在する岩戸遺跡は1967年に東北大学芹沢長介名誉教授によって発掘調査された（第1次調査）。1978年春に第2次調査、同年秋に第3次調査が再調査され、新たな資料群が追加された。第2次調査時に鹿児島県にその噴出起源をもつ約3万年前の始良Tn火山灰層（AT）が発見され、このテフラが岩戸遺跡第I文化層の石器群の直下に位置することがあきらかとなった。

第1節では九州地方の旧石器時代研究史をまとめた。

第2節では第1次調査と第2・3次調査の資料を加え、岩戸遺跡内の石器群を層位的に再整理し、第I文化層の石器群の分析とその編年的な位置づけをおこなった。

第3節では九州地方東部の石刃技法の技術的な特徴と変遷観を明らかにした。第1期は祖型石刃技法→第2期打面転位技術と打面周辺に調整技術をもつ石刃技法→第3a期は打面調整の未発達な石刃技法→第3b期は剥片を石核に転用して小形石刃を生産する石刃技法への変遷観を示した。そして、九州東部の石刃技法の特色として、第1～3期にかけて石刃が漸移的に量産化されること、調整技術に関して稜形成のための作業面調整が一貫して看取できないこと、打面周辺に対する調整作業が徐々に後退する傾向を指摘した。

第4節では、岩戸第I文化層と近畿地方の「国府系石器群」の瀬戸内技法を工程別に比較検討した。その結果、岩戸第I文化層は、素材の獲得方法の規則性が強くないこと、打面調整技術の未発達、目的剥片の生産性や依存度の低さを指摘できた。

第5節では第2・3次調査で確認された岩戸第I文化層の上位にある岩戸第6層上部石器群を中心に九州地方西北・東部地域の資料群と比較して九州地方後期旧石器時代終末期のナイフ形石器の形態を6種類に分類し、「小形化」と「素材の変形度が小さいため、形態のバリエーションが多く見られる」との特徴を指摘した。

第6節では近年新資料の増加と研究の進展が著しい九州地方旧石器時代編年成果と比較しながら、岩戸遺跡資料群の再評価をおこない、第6章のまとめとした。

第7章 九州地方の後期旧石器時代石器群の編年研究では、「黒色帯」、広域テフラのAT、宮崎県下の地元産出のテフラを援用し、九州地方の後期旧石器時代編年を構築した。東北地方同様に後期旧石器時代を第1～4期に大別し、第1・2期を前半期、第3期を後半期、

第4期を終末期とした。九州地方の後期旧石器時代第1期とした石器群は、岩戸遺跡、牟礼越遺跡、後牟田遺跡、沈目遺跡、曲野遺跡、石の本遺跡等の「黒色帯」下位から検出した一群である。それらは石器組成に刃部磨製石斧、不定形の剥片を部分的に二次加工した粗雑なナイフ形石器、台形様石器を保有する石器群である。二次加工技術は面的に施すものが多い。剥片生産技術に石刃類を連続的に剥離するような技術がみられない。第2期とした石器群は、「黒色帯」中位から発見される一群とした。第2期の石器群は出土層位と技術的な特徴の相違からA・B群の二つに分けた。A群は石器組成が台形石器と小型の切出し形のナイフ形石器で構成される。剥片生産技術は打面と作業面が一定していない石核から剥片類が作出される。縦長剥片を連続剥離する技術がみられない。下城遺跡、上場遺跡、狸谷遺跡第1文化層の石器群があげた。B群は石器組成に縦長剥片を斜めに整形する二側辺加工のナイフ形石器、一側辺加工のナイフ形石器、台形石器、切出し形のナイフ形石器、周縁調整の尖頭器がある。剥片生産技術は単・両設の打面の石核から縦長剥片を連続的に剥離する石刃技法が存在する。駒形古屋、駒方C遺跡、百枝遺跡、長崎県百花台遺跡等の石器群をあげた。九州地方中部地域の層位的事例から勘案してA群→B群の石器群の時間的な推移が考えられた。後期旧石器時代第3期は「黒色帯」やATの上位にあり、細石刃文化が出現する以前の時期までを当該期とした。南九州地方では韓国岳起源の小林軽石（約1.6万年前）下位から発見される石器群である。第3期は出土層位と石器群の技術的な相違から古段階（第3a期）と新段階（第3b期）に細分した。第3a期の石器群は「黒色帯」やATに近い層準で発見され、斜め整形の二側辺加工のナイフ形石器、一側辺加工のナイフ形石器、小型の切出し形のナイフ形石器、各種の台形石器、剥片尖頭器、三稜尖頭器、周縁調整尖頭器、スクレイパー、彫刻刀形石器、チョッパー、チョッピング・ツールが組成する。剥片生産技術は調整技術の未発達な石刃技法、打面と作業面を交互に入れ替えながら剥片類を剥離する技術、石核の周縁から求心状に剥離する技術などがある。第3a期の特徴は、第2期B群の石器群の技術的な伝統の上に新たな器種と剥離技術が追加され、さらに瀬戸内的な系統や韓半島で発見される石器類も付加される。新たな器種として剥片尖頭器、三稜尖頭器などがみられ、九州地方全域に分布する。これらは韓半島で発見される石器群の影響が予想される。岩戸遺跡第I文化層、下城遺跡第1文化層、中山遺跡、平沢良遺跡出土の石器群等をあげたが、この時期の遺跡が九州地方で最も多い。

第3b期の石器群は石器組成に縦長剥片の打面部を基部として基部と先端部に二次加工を施したナイフ形石器をもつ。それに、切出し形のナイフ形石器とスクレイパーが共伴する。剥片生産技術には厚手の剥片類を素材とし、その打面から腹面と背面のなす稜を利用して目的とする縦長剥片を作出する。これらは規格性の強い、生産性の高い石刃技法といえよう。特に、縦長剥片やそれを素材としたナイフ形石器の背面側にはポジティブな剥離痕を多く残しているのが特徴的である。岩戸遺跡では岩戸第6層上部出土の石器群は、第3a期の上位で層位的に検出された。第3b期の石器群は細石刃石器群に先行する一群である。当該期の九州地方では、東部に小型の石刃を素材とした基部と先端に二次加工したナイフ形

石器、南部で小型の二側辺加工のナイフや台形石器、西北部で百花台型の台形石器が濃密に分布する。第3a期にみられた斜め整形の二側辺加工のナイフ形石器、剥片尖頭器、三稜尖頭器、周縁調整尖頭器類が第3b期には石器組成から姿を消す。また、九州地方にみられた瀬戸内技法、国府型ナイフ形石器も発見されなくなる。岩戸第6層上部、南学原第1地点遺跡、野首第2遺跡、水迫遺跡、瀬戸頭遺跡、堤西牟田遺跡第IV文化層、百花台遺跡Ⅲ・Ⅳ層、原ノ東遺跡9層等の石器群があげられる。第4期は細石刃を主体とする石器群である。南部の宮崎県側に位置する遺跡群では、韓国岳を給源とする小林軽石以降に細石刃を主体とする石器群が発見される。九州地方での細石刃を生産する技術は、大別して野岳型、船野型、畦原型、福井型等に分類でき、前二者を古く位置づけた。一方、福井洞穴の層位的な事例を根拠に「福井型」細石核に土器の使用が始まるとされ、この時期に日本列島は旧石器時代から縄文時代へ移行したものと推定される。

第8章 日本列島の後期旧石器時代石器群の比較研究－東北地方と九州地方の二地域の比較では、両地方に発達した「暗色帯」・「黒色帯」やATを基準に両地方で設定した第1・2・3a・3b・4期の石器群を整理し、その類似性と相違性を比較検討した。後期旧石器時代に入り、その初頭に位置づけられる「暗色帯」・「黒色帯」の下位から出土する石器群には共通性がみられ、その後、両地方で徐々に相違があらわれてくる。そして、後期旧石器時代に両地方で地域的な大きな違いがみられるのは「暗色帯」・「黒色帯」の上位より出土する石器群からである。その相違とは、素材を得るための「石刃技法」に対する依存度と石器組成である。東北地方では石核の打面や作業面に対して調整を駆使し、長大な石刃を獲得する。石器組成には石刃を素材とした基部と先端に加工したナイフ形石器、エンド・スクレイパー、彫刻刀形石器等が多くみられる。東北地方は剥片生産技術の中で石刃技法の依存度が高い。一方、九州地方ではその依存度が低い。石器組成を構成する中身は石刃技法以外の剥片生産技術で剥離されたが器種が多い。多様な型式をもつ台形石器、切出形石器、剥片尖頭器、三稜尖頭器等である。九州地方はそれぞれの目的に応じて素材が生産されている。このように「石刃技法」に対する依存度が地域的な違いとして明瞭に現れたのは「暗色帯」・「黒色帯」の上位より出土する石器群からである。しかし、石器組成や剥片生産技術の違いは、先行する「暗色帯」・「黒色帯」中位の石器群にも見いだされ、その初動がこの時期より始まったものと言える。

終章では結びとして日本列島内の後期旧石器時代に先行する時期、後期旧石器時代第1・2・3a・3b・4期に細分した編年案を素描し、そこに三つの大きな変動期があったと解釈した。第一の変動期は前期旧石器時代から後期旧石器時代の石器製作上の変化と考えた。その要因の一つとして人類史の変貌を予想した。しかし、後期旧石器時代の初頭（第1期）までは石器製作上の共通性が伺えた。第二の変動期は後期旧石器時代の初期段階に北東アジアの周辺地域から石刃技法の流入と、それによって日本列島内で惹起した両地域の石器製作上に違いが現れたと考えた。一つは石器組成やナイフ形石器の形態上に違いがみられたことである。いま一つは石刃技法の調整技術上の相違である。筆者はこれらの相

違をA T降下以前の「暗色帯」や「黒色帯」の層中に看取できると指摘した。第三の変動期は細石刃を製作する技術が大陸からほぼ同時に流入した時期である。両地域の細石刃文化は剥離工程や組成上に細部で違いを看取できるが、短期間に各地域で等質な細石刃を生産する。これらの三つの変動期は日本列島外の近隣周辺地域からの直接・間接的な影響を受けて生じたことが予想される。すなわち、日本列島の旧石器文化が北東アジアの潮流の変化に連動して起こった歴史的現象と考える。ただし、自然史や人類史の変貌との因果関係を結びつけて文化史的に説明するにはいくつかの学際的な手続きが必要になってこよう。

以上、日本列島で石器製作上から概観した場合、東北地方と九州地方で地域的な違いが最初にみられるのは第二変動期である。本論では両地域の後期旧石器時代を第1・2・3a・3b・4期の石器群を比較検討した結果、両地域の石器製作技術の相違は後期旧石器時代第2期に出現することが明らかとなった。旧石器の出土層位から見た場合、A T降下以前の「暗色帯」や「黒色帯」の層中にあったものと考えられる。この時期こそが日本列島の地域性が成立した時期の始まりと考えた。